丸茂祐佳

わが国の舞踊学の先駆者小寺融吉は民俗芸能や能などさまざまな分野の研究を行なったが、それらの業績の中で私が最も興味をひかれたのが、日本舞踊の分野である。その中でも、特に動作を分析した人として注目した。動作を分析するという試みは、早くも二作目の著書『舞踊の美学的研究』の中でみられるが、のちにこの仕事は二つの流れに分かれていく。

そのひとつの流れは、『をどりの型』という著書になってあらわれてくるもので、すでに板谷徹氏によって報告されている(「日本における舞踊研究の足跡-日本舞踊史を中心に-」、『舞踊学』創刊号)。

しかし、そこにもうひとつの流れが生じていたことは、今までにあまり取り上げられなかったように思う。それは、分析した動作を整理分類し、科学的に体系化しようとする試みであった。私は日本舞踊の動作を科学的に体系化しようと試み、その方法を提唱した初めての人が小寺ではないかと思っている。そこで、この研究に焦点を絞り、報告させていただく。

本題に入る前に、小寺の舞踊学と私の出会いについて少し触れておきたい。私は大学の卒業論文に「妓楽踏舞譜」という、嘉永七年(安政元年)に初代西川鯉三郎によってまとめられた『西川流秘伝書』の中にある舞踊譜を考察したが、『西川流秘伝書』の存在は小寺の著書『日本近世舞踊史』の中で知った。言わば、私にとって小寺の本との出会いが舞踊学と接する糸口になったと言っても過言ではない。その後も日本舞踊部の在り方や日本舞踊における娘形・奴の動作の分析を小寺の方法に学んできた面がある。このようなわけで、未熟ではあるが、小寺の研究について報告することをお許しいただきたいと願っている。

一、分析方法における二つの特色

動作を分析する上において,小寺の方法には二 つの特色がみられた。

ひとつは、〈紋切型〉という言葉の応用である。「いつの間にか、かういふ場合には、かういふ型をする」(『日本近世舞踊史』)というのが、紋切型がで、そのひとつに「男にせよ女にせよ、自分の袖を代るがわる見下ろすといふ事があり、貧しい者が自分の貧しさを恥ぢる悲しむといふ場合、又なんとなく自分の哀れさを悲しむ場合に用ゐられる」(前同)として、普通、一般的に呼び慣わしている〈姿見〉という術語の動作をたとえに挙

げて説明している。実技者や振付者は〈姿見〉の意味をあらかじめ知っていて、その振では自分の哀れさを悲しむような気持ちで踊ったり、そのような意味合いの歌詞では〈姿見〉の振を付けたりするわけだが、小寺は多くの舞踊を観察して動作を分析した結果、振付上における法則を見出し、〈紋切型〉という言葉を応用したと思われる。

ここで、小寺が用いる〈型〉という用語は、「尤も型といふものは舞踊の動作以外にも広く用ゐられて」(『舞踊の美学的研究』)とあるように、〈型〉を舞踊の動作の意味で用いることがある。これは、日本舞踊を構成する三要素(舞・踊・振)の意味で〈振〉の用語を用いるために、小寺が意識的に〈型〉と〈振〉を使い分けたものと思われ、この傾向は初期の著書の中で顕著である。

もうひとつの特色は、能では〈左右〉〈抱え扇〉など型の名称を使って説明しているにもかかわらず、日本舞踊では術語をほとんど使っていないことである。〈えび反り〉を「例の両膝を下につけて居り、思ひ切りうしろにそる形」、〈女夫指〉を(夫婦となる意味で)「人差指を揃へる」などと、文章を以って動作を説明しているのである。

以上の特色から、小寺には従来の概念にとらわれないで日本舞踊を見つめようとする客観的な洞察力があったことが窺えよう。

二、二つの舞踊譜との対比

小寺は『舞踊の美学的研究』で,第六章足の動作の二様式,第七章腕の動作の均斉と対照,第八章腕の動作。の各章を立て,動作分析の基準を主に四肢に置いた。このうち,第八章の「二,日常生活的動作」の中で,男女の道行物の舞踊から,女のみの動作,男のみの動作,二人とも座った場合,二人とも立った場合に分けて,約四ページにわたり,動作を分析整理している。分析した動作は〈口説と呼ばれる恋の場面の根本的動作〉と書いているが,それは素手の場合としたからで,傾城遊女・姫役など役柄によって持ち物が変わるという前提のもとに,違うバリエーションを想定している。

たとえば、ここで記述された動作ひとつひとつ に名称なり記号なりを付ければ、道行舞踊は記号 だけでその振を書き表わすことができるほど、綿 密かつ正確なものである。おそらく、この研究が 進めば舞踊譜の考案へつながったかもしれない。

そこで、その箇所に、「妓楽踏舞譜」と『標準日本舞踊譜』(東京国立文化財研究所編、創芸社、昭和35年)の二つの舞踊譜の譜語と動作の説明を対比させた資料を作成した(一部を文末に掲載した)。その資料に基いて報告したことを、次に簡略に述べる。

小寺が研究者の立場で動作を分析整理した人と

すれば、全く逆の立場に当たる実技者初代鯉三郎の「妓楽踏舞譜」は名取弟子対象に授与したものであったから、動作の体系化や説明に実技者でないとわからない部分がある(なお、「妓楽踏舞譜」については第4回及び第20回の当学会で発表した。『舞踊学』創刊号・第9号に要旨を収録したので参照していただきたい)。

『標準日本舞踊譜』では、比較した譜語の多くが〈手ノ動カシ方〉と〈相手ノアル姿勢ト動作〉の部門に収められるものであった。小寺の〈口説と呼ばれる恋の場面の根本的動作〉は腕を基準に男女のクドキを分析したのであるから、両者の分類方法に何らかの共通点があったと思える。実本に『標準日本舞踊譜』の譜語表を見ると、基本の姿勢と動作、本来意味を持たない姿勢と動作の三つた時、のとり類があり、扇を持った時、手拭を持ってた時、またリズムを主とするもの、流動を主とするもれていることが一目瞭然である。方法は異なるれていることが一目瞭然である。方法は異なるのように動作を分析整理し体系化したところに、小寺と共通の姿勢が見られる。

三、『標準日本舞踊譜』に与えた影響

今見てきたように、具体的な分類方法において は両者に差異が認められるが、小寺が抱いた舞踊 譜の理想は、『標準日本舞踊譜』に大きく反映さ れている。

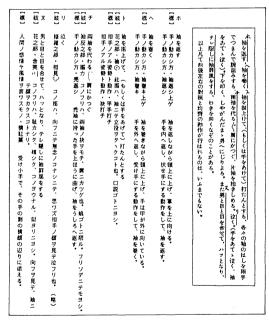
小寺は『舞踊の美学的研究』の中で、「もし舞 踊譜が発明せられたならば,ひとり習得,教授, 普及に便利であるに止まらず、古きものの保存や 比較研究の資料になくてならぬものになるであろ う。今日,振付の学問的研究が全く困却されてゐ るのは,一つはこれに基づくのである」と研究者 の立場からも舞踊譜が考案されることを切望し, 『近世日本舞踊史』第八章所作事の組織の「動 作の術語と舞踊譜」の項の中で、「術語は神楽、 舞楽、能、琉球の舞踊、各地の郷土舞踊に今日も行 はれるものは尽く集めて,時間的にも空間的にも 最も普遍性の多く, 且つ専門家以外にも直ちに了 解し得る名称を選まなければならぬ。剣道、柔道、 水泳、角力の術語。歌舞伎一般、人形芝居の術語 も有力な参考資料である。かくて日本の舞踊は始 めて科学的に研究せられるのである。また古典の 記録もなし得るのである。」と日本舞踊が科学的に 研究されることの必要性とその方法を説いている。 小寺が動作を分析する上において見せた客観的な 洞察力が、日本舞踊を科学的に体系化する方向に と導いてきたのではないかと思われる。

「妓楽踏舞譜」をはじめ、踊る人のための舞踊 譜は今日も新しく考案されつつある現状だが、踊 る人のためばかりでなく日本舞踊の研究のために 考案され公刊した舞踊譜は,私が知る範囲内では 『標準日本舞踊譜』だけである。

『標準日本舞踊譜』にはいくつかの特色や利点が挙げられるが、その中で、日本舞踊の正確な記録と保存のための必要を感じて作成されたという点(改訂版より)と、譜語の選定にあたっては古来いわれている術語にこだわらなかったという点(改訂版より)は小寺の理想とする舞踊譜の在り方に基づいているものと思える。さらに、概説の中の「舞踊譜への期待と譜語の整理」の項は、『近世日本舞踊史』の「動作の術語と舞踊譜」の内容を踏襲しており、小寺の舞踊譜に対する考え方を受け継いでいる。

つまり、『標準日本舞踊譜』が研究者を対象とした、記録による日本舞踊の保存方法のための唯一の舞踊譜として価値づけられるならば、それは小寺の理想とする舞踊譜の在り方とその方法論を継承したものであったと言えるのである。

なお、学会の当日は、小寺融吉の記述した動作が正しく文章で表現されていることを実証するために、清元「お染久松」の中で用いられる振の中から、それに該当すると思われるところを取り出して実演した。西川流宗家西川扇藏師にご厚意を賜り、演者は西川小扇友女(お染)、西川扇与一(久松)両氏のご協力を頂いた。この場を借りて御礼申し上げる。



《配布資料(抜粋)》

囲み枠内に『舞踊の美学的研究』の中で小寺が試みた動作分析の箇所を掲示し、それに対応する「妓楽踏舞譜」(〔妓〕と略記)と『標準日本舞踊譜』(〔標〕と略記)の各々の譜語と動作の説明を列記した。